

氏 名	いけだ こうじ 池田 耕二
本 籍	大阪府
学 位 の 種 類	博士（工学）
学 位 の 番 号	甲第28号
学位授与年月日	平成24年3月15日
学位授与の要件	本学大学院学位規則第6条
学位論文題目	理学療法臨床実習における実習生の意識変化の解析に 関する研究～臨床実習における指導構築に向けて～
論文審査委員	主 査 教授 吉 田 正 樹 副 査 教授 小 柳 磨 毅 副 査 教授 松 村 雅 史

論文内容の要旨

我が国で理学療法士として就労するためには、理学療法士養成校に入学し、学内で一般教養科目、専門基礎科目、専門科目を、学外で理学療法臨床実習（以下、臨床実習）を履修することが必要である。一方、近年、日本は高度医療、超高齢社会を迎えたことから理学療法士の需要は大きくなり、理学療法士養成校も急増している。その結果、臨床実習には指導者不足、教育水準の不統一、実習生の多様化などの新たな問題が生じ、それらを背景にして実習生の抑うつやドロップアウト等が問題となっている。これらの問題を予防するためには、実習生の意識を理解することが必要である。そのため、従来からある心理テストだけではなく、新たな視点から実習生の意識を解析していくことが必要である。この着眼点から、本論文では人文社会系、理工系の学問等を融合させながら問題を解決しようとする教育工学の手法を取り入れ、実習生の意識を多角的に解析している。

第3章では、実習生の知識、感情、意欲の3因子に着目し、質的内容分析を用いて探索的に実習生の日誌を解析し、実習期間を通して、実習生は意識の中で理学療法実践を多く学びながら緊張や焦りを多く感じ、思考的な意

欲を心がける傾向にあることを明らかにしている。続いて、第4章では、同じ3因子に着目し、質的（言語）データの因子分析とされる数量化Ⅲ類を用いて、実習生の日誌を探索的に解析している。その結果では、実習生の意識構造は、知識－感情の軸と冷静な実習－躍動的な実習の軸によって構成されていること、そして、意識変容過程は「感情優位」、「知識優位」、「専門・統合優位」、「意欲優位」、「冷静優位」、「躍動優位」、「混合」の7タイプに分類できることを示している。第5章では、実習生に対する理解を深めるために、従来は着目されなかった肯定的、否定的、高喚起、低喚起感情の4つの感情変化に着目して、実習生の日誌を解析し、実習生にはいくつかの感情変化パターンがあることを示している。さらに、第6章では、実習生の内面を構成すると考えられる9項目と睡眠、自宅勉強時間、自己目標達成度の12項目からなる調査票を作成し、実習生に対して調査を行い経時的変化を解析している。その結果、実習生には実習理想因子、実習負荷軽減因子、不安軽減因子の3つの内面因子があること、それら3因子と睡眠、自宅勉強時間、自己目標達成度の経時的変化からは、精神的ストレスは実習期間を通して軽減していくこと、精神的ストレスと自己目標達成度の間には因果関係があること、評価実習と総合実習では実習生の睡眠と自宅勉強時間の関係が逆転することを明らかにしている。さらに第7章では、理学療法士アイデンティティーと関係があるとされる実習生の抱く理想の理学療法士モデルに着目し、その変化から実習生の質的变化を解析し、実習生の質的变化に合わせた指導の必要性を示している。

以上の成果は、学術論文や国際学会などで発表されている。今後、多角的な意識変化の解析から得られた知見をもとに構築した指導の具体的な実践法の確立や効果の検証を経て、臨床実習の指導方法を構築するツールとしての活用が可能になることが期待できる。

論文審査結果の要旨

本論文は、理学療法士教育における臨床実習に着目し、臨床実習期間中の実習生の意識変化を解析する手法を教育工学的観点から提案し、実際に検証を行っている。

実習生の知識、感情、意欲の3因子に着目し、質的内容分析を用いて探索的に実習生の日誌を解析し、実習期間を通して、実習生は意識の中で理学療法実践を多く学びながら緊張や焦りを多く感じ、思考的な意欲を心がける傾向にあることを明らかにしている（第3章）。これは、実習生の内的な状態である知識、感情、意欲を分析しようとする画期的な研究であり、その結果は、指導者は実習生を指導するにあたり、これら3因子の変化に配慮することの必要性を示した有効な研究であると判断した。

同じ3因子に着目し、質的データの因子分析とされる数量化Ⅲ類を用いて、実習生の日誌を探索的に解析した結果、実習生の意識構造は、知識－感情の軸と冷静な実習－躍動的な実習の軸によって構成され、意識変容過程は「感情優位」、「知識優位」、「専門・統合優位」、「意欲優位」、「冷静優位」、「躍動優位」、「混合」の7タイプに分類できることを明らかにしている（第4章）。さらに実習生に対する理解を深めるために、従来は着目されなかった肯定的、否定的、高喚起、低喚起感情の4つの感情変化に着目し、実習生の日誌を解析した結果、実習生にはいくつかの感情変化パターンがあることを明らかにしている（第5章）。これらの研究は、実習生の指導として、意識の構造や変容過程、感情変化を上手く活用することが出来れば有効な指導法が構築できる可能性を示しており、この結果から優れた指導方法の開発ができることが期待できると判断した。

実習生の意識変化を量的に明らかにするために、実習生の内面を構成すると考えられる9項目と睡眠、自宅勉強時間、自己目標達成度の12項目からなる調査票を作成し、実習生に対して調査を行い経時的変化を解析した結果、実習生には実習理想因子、実習負荷軽減因子、不安軽減因子の3つの内面因子があること、それら3因子と睡眠、自宅勉強時間、自己目標達成度の経時的変化からは、精神的ストレスは実習期間を通して軽減していくこと、精神的ストレスと自己目標達成度の間には因果関係があること、評価実習と総合実習では実習生の睡眠と自宅勉強時間の関係が逆転することを明らかにしている（第6章）。この研究は、精神的ストレスのみではなく、物理的な尺度である睡眠時間や自宅勉強時間を配慮する指導の実用性を示し、

別の観点からの指導方法開発の要になる研究であると判断した。

実習生の質的变化を明らかにするために、理学療法士アイデンティティと関係があるとされる実習生の抱く理想の理学療法士モデルに着目し、その変化から実習生の質的变化を解析した結果、実習生は、評価実習では「理学療法士にはやさしさや協調性が大切である」といった方向に、総合実習では「理学療法士には専門職としての冷静さや判断力、忍耐力、努力が大切である」の方向に質的に変化することを示している（第7章）。これは、今後実習生の質的变化に合わせた指導が必要であることを示した研究であると判断した。

以上のように本論文は、実習生の内面を解析し、新たな指導方法を確立するために重要な研究として、新規性と客観性を有しており、博士学位論文としての条件を十分に満たしていると判断した。

論文審査委員	主	查	教授	吉	田	正	樹
	副	查	教授	小	柳	磨	毅
	副	查	教授	松	村	雅	史

論文審査結果の要旨

最終試験の結果、合格と認める。

論文審査委員	主	査	教授	吉	田	正	樹
	副	査	教授	小	柳	磨	毅
	副	査	教授	松	村	雅	史